Meisei University

『トリスタン物語』と『ポンテュウ伯の娘』

――ある学会報告から――

佐佐木茂美*

1995年10月29日、「日本フランス語・フランス文学会」総会（於郡山・奥羽大学）の特別講演でのこと、ポワティエ大学教授、ガブリエル・ビアンシオット（Gabriel Bianciotto）氏は、下記のごとくまず拙稿二編に依拠して講演本題に入る。表題は「ベルールの『トリスタン』における物語の断片化と感情の非適合性」（稿者はここで氏より講演草稿第一ページの送付を事前に受け、参照している）

「『国際アーサー王学会年鑑』および『ランセスヴァルス年鑑』に掲載をみた佐藤輝夫に捧げた佐佐木茂美氏による追悼論文中で、氏が近ごろ注意を喚起されているように、トリスタン伝説は「トリスタンとイズーのデータをもとに愛と死を瞑想する」ことに自ら全生涯を賭けられた、氏の傾倒されている師の如き、仏文学専攻の大学人の業績を通じて日本においては馴染みのものとなった。氏の言葉によれば、1953年すでに文庫本の形で佐藤輝夫が公にしたベデイエの『トリスタン』訳により、「今日、最も広範な日本の読者層もトリスタン伝説がいかなるものかを知っている」とのことである。」（Ainsi que l'a rappelé récemment mademoiselle Shigemi Sasaki dans les chroniques nécrologiques qu'elle a consacrées à Teruo Sato, publiées dans le *Bulltetin Bibliographique de la Société Internationale Arthurienne* et dans le dernier *Bulletin de la Société Rencesvals,* la légende tristanienne a été rendue familière au Japan à travers les travaux d'universitaires francisants tels que le maître qu'elle honorait, qui a lui-même consacré toute son existence "à méditer, à partir des données de Tristan et d'Iseut, sur l'amour et sur la mort". Grâce à la traduction du *Tristan* de Bédier publiée par T. Sato en livre de poche dès 1953, affirme-t- elle, "de nos jours, le public japonals le plus étendu sait ce qu'est la légende de Tristan"）

講演に先だって、フランス中世文学関係では最も重要な、最古の上記二つの国際学会（国際アーサー王学会およびランセスヴァルス）から、稿者は1994年４月、先師、佐藤輝夫先生の逝去直後ごろより、追悼文を寄せるようにとの依頼を受けていて、それが本年春・夏にかけて相次いで刊行を見たのであった[1]。先師は1964年より、「ランセスヴァルス学会」（フランス最古の叙事詩『ローランの歌』の古戦場に因んで命名され、叙事詩を扱う学会）、

* 言語文化学科 教授 中世フランス文学

NII-Electronic Library Service

Meisei University

1981年より、「国際アーサー王学会」(アーサー王を核とした伝説に材源を求める、フランスを基点にヨーロッパ各国語への書換を取り上げる学際的な学会) の日本支部の、会長を生前務められ、フランス中世文学の叙事詩および物語・抒情詩の分野でわが国の学会を代表されてきた。

近年は、「日本フランス語・フランス文学会」で、フランス人の専門家の招聘は多い。だが講演のなかで、日本人の論文名が冒頭から引用されたことは記憶はない。佐藤先生追悼の意図が、まず講演者にあり、わが国の研究現状への認識があって、アーサー王学会『年鑑』の拙稿がそのままテクスチアルに援用されたもので、さらにほかの拙稿四編のページ数も含めたレフェランスがあがった[2]。

じつは、面識のまったくないビアンシオット氏より、今回来日講演の際に“ぜひお目にかかりたい”旨の丁重な書状 (10月5日付) が先に届いていた。氏は最新の論文 (抜刷) 二編にくわえて、その講演冒頭部分を同封、稿者に“最初に”(en premier)“御覧にいれる”とあった。氏の特別講演を学会の通知状等を見過ごしていたためこの書状により知った。稿者への学会招待はビアンシオット氏によりなされた事になる。

稿者が、国際面でわが国の研究状況の紹介を始めたのは、1971年であったから、佐藤輝夫先生が、じつに65年前の1931年すでに東京大学仏文研究室編纂の『仏蘭西文学研究』(巻九) [3]にトマ・ダングルテールの『トリスタン物語』の研究を発表されていたことは、国外で知る人はなかった筈である。だが、それより半世紀 (1981年) に『トリスタン伝説・流布本系の研究』(中央公論、789+19pp.) を刊行された際に、稿者はフランス、アメリカ、イタリアの専門誌三、計四回にわたって同書を紹介した[4]。従って、今回の講演のなかで、拙稿が引証されたのは、追悼論文に留まらない。そうした佐藤先生の御業績 (今日までのわが国の当該分野における全業績、ともあるいは言い換えのできる) が、日本仏文学会総会の席で、学会招待の仏人学者の講演のなかで、明確に指摘された事はあるいは先師に歓んでいただけたか、と思う。講演者は続ける。

> 「佐佐木氏は自身ごく最近『ロマニア』誌に「イズーのエメラルドとトリスタンの碧玉」に関するきわめて学問的な論文を発表した。またわれわれの同僚 (佐佐木) が90歳のアレクサンドル・ミシャに捧げられた『記念論文集』の一巻において発表している日本における中世フランス研究の歴史にかんする最も興味深い総括は、『国際アーサー王学会年鑑』の日本支部欄に定期的に収録された日本におけるアーサー王文学関係の非常に豊潤なパノラマのなかでトリスタン研究の現状を明らかにしている。それだけに、(研究に) 通暁した聴衆を前にしてトリスタンを語る事に、私はますます困難を覚えるのです。」

(Mademoiselle Sasaki a publié elle-même il y a peu dans *Romania* un article particulièrement savant sur “L'émeraude d'lseut et le jaspe de Tristan.” Enfin la très intéressante synthèse sur l'histoire des études médiévales françaises au Japon que notre collègue a donnée, dans le volume de *Mélanges dédiés à Alexandre Micha* pour son 90e anniversaire, met en évidence la situation présente des études tristaniennes dans le très riche panorama des travaux japonais sur la littérature arthurienne, régulièrement

NII-Electronic Library Service

Meisei University

répertoriés du reste dans la section japonaise du *BBSIA*.Il ne m'en est donc que plus difficile de parler de Tristan devant un public averti.)

『ロマニア』誌上の拙稿への言及はともかく[5]、『国際アーサー王学会年鑑』掲載の1974年より20年間、稿者が担当してきたわが国における研究状況の紹介・書評を講演者がここで依拠していることが注目される。氏は私信でこの欄に"いつも非常な関心を寄せてきた"(très intéressé toujours par votre bibliographie) と述べている[6]。

しかし、稿者の驚きは、『アレクサンドル・ミシャ記念論文集』所収の稿者の論文——「われわれの同僚」とあるのは稿者のことである——を引用している点である。コレージュ・ド・フランス教授(ミシェル・ザンク (Michel Zink)) 名を筆頭とした同『論文集』に執筆依頼があったのは、佐藤先生の亡くなられる直前 (1994年春) のことであった。締切まで5カ月、欧米人のみが執筆者であった。稿者に再三にわたる依頼がなされた、のは単に東洋の端からもソルボンヌ大学名誉教授に敬意の一文が寄せられることを委員会が望んだ(東洋人学者に執筆依頼がなされるのは稿者の専門では極めて稀なことである。人選は委員会があたる)、こともさる事ながら、アーサー王伝説関係の世界的権威である氏に満足して頂くためには、かつての稿者の学位論文[7]にたいし審査委員会の一メンバーとして極めて高い評価をくだし、アーサー王学会に稿者が係わってきたことを可とする、かの地の師の意向がくみ取られたものと思われる。1995年6月、『論文集』[8]の贈呈式がソルボンヌで行われ、稿者は出席しなかった。それを惜しまれ、寄稿にたいし、ミシャ先生の方から礼状を頂いていた。

手持ちの資料で、一息に書けるテーマ「フランス中世発見」とし、そのうえで3カ月の特別猶予が与えられた。ビアンシオット氏の言葉を借りれば「総括」は容易であった。学生時代より四半世紀にわたる第三者の業績の紹介——ひたすら他を推薦すること、これは非常に厳しい任務であるというより試練——が、あったからである。

執筆に追われているとき、アリゾナ州立大学から、「ヨーロッパ中世・ルネッサンス再考」の学会 (同大学、アリゾナ国立大学、北アリゾナ大学共催) への招待があった。1995年2月、同原稿に基づき口頭発表 (同月18日) のため渡米した。表題、「日本におけるフランス中世の発見」(Discovery of the French Middle Ages in Japan)。chair はウイリアム・ヘンドリクスン (William Hendrickson) 州立大教授。議論が噴出し、好評であったが、本稿の主題から外れる。それよりも、この学会の会期を通してニューヨークの国際トリスタン学会が刊行している関係の重要な専門誌『トリスタニア』(*Tristania*)[9]の刊行責任者等の出席があって情報交換のできたことをここに報告すべきであろう。同誌次号 (XVI 号) には「国際アーサー王学会」での稿者の発表が集録されることになっていて、その打ち合わせもなされた[10]。同号での最も傑出した論稿と信じ難い言葉もその中で聞かれた。

最後に、ビアンシオット氏の講演内容に触れよう。ベルールのテクストは既に今世紀初頭ベディエにより旅芸人の伝統的手法に竿さすものとの指摘がなされた。「『ローランの歌』と『エレック物語』との間にもし『トリスタン』が存在せぬのなら、われわれはそれを創造する必要がある」[11] 口伝と書伝の間にある流布本系のベルールの聴衆は、トマの宮廷風

NII-Electronic Library Service

Meisei University

のヴァージョン『トリスタン』と同じ聴衆としても、好みは異なり、かれの『トリスタン』は伝説の原型にむしろ近いと看做される。テクストそのものが4485詩行の断片（初めと後半部を欠く)、筋は断絶している。そのうえ、各場面の間の移行、展開がぎこちなく、それぞれ断片の様相を呈する。ベデイエの見解にたいし、十二世紀末年の散文物語の出現で完成をみる「絡み合い手法」(entrelacement) ——場面間に伏線が用意され、一時的切断後に、次の場面で伏線は本線へと「絡み合い」つつ完結へと向かう——がすでに十二世紀末現われている、ベルールも例外ではない、とする研究者も近年はあった。講演者は叙事詩的伝統も、物語テクニックの先取りも退け、挿話の縫しろがスムーズに行かぬ——“不適合性”——、そのぶん、さらに高次元の仕掛けが縫込まれていないかとして、テクスト構造と意味を問うた。

佐藤輝夫先生の立場は、ベルールと共通のモデル（フランス語による亡失作品）をもつ、1170年代の制作が推定されている、ドイツ語のアイルハルト・フオン・オベルクの『トリスタン』(ほぼ、全容を伝えるもの) をテクスチュアルに比較、亡失作品を呼び起こし、ベルールの受容を推論していくもので、ベルール本の「断片」は、ベデイエのいわば「宣言」（上記）にとどまっていたものが、対アイルハルトに照らすことで叙事詩的語りの伝統がいかなる度合で顕現するかが、けざやかに立証された。かたや、一方の語りものであるファブリオに登場人物（イズー、ブランジアン）が比較されて、——伝説を血縁関係のエロスによる崩壊と読み、ファブリオを想起させる手法をみる[12]。先生の見方は講演者の参照するところとはなっていない。「断片」とテクストの間の十分な客観的検証は示されなかっただけに惜しまれる。

1995年2月と10月の上記二つの学会（日本フランス語・フランス文学会総会と「中世・ルネッサンス再考」）の間に、同年7・8月、フランス・オルレアン大学（7月10日－14日）およびアイルランド・ベルファストの大学（7月26日－8月1日）で開催されたフランス中世関係の二つの学会があった。

前者は第三回クリスチーヌ・ド・ピザン学会であった。先回は稿者が招待講演者であったり、員数・顔触れともに極めて厳選された、一作家の研究者の国際的集いで、討論に夜を明かす、稿者の研究には実り多いものであったが——シャルル・ドルレアンの学位論文の執筆者として、オルレアン市長に真先に紹介されるなど、厚い歓迎ぶりなどもさることながら——本題から外れ[13]、いずれ論稿のなかで消化されるはずである。

後者は、ベルファストの「女王の大学」(The Queen's University of Belfast) における「国際宮廷風文学会」(International Courtly Literature Society) の第八回国際総会であった。創立はアメリカの比較文学・フランス中世学者レイムンド・コーミエ (Raymond Cormier) 教授による[14]。日本関係のヨーロッパ中世のビブリオ作成を1980年、面識のない同教授より依頼を受けたのは、当時、稿者がフランスのリヨン大学（客員教授）に日本文学・比較文学で奉職していたからに相違ない。そのころは創立間もない、新しい学会で、最近まで、日本人会員二名。ベルファスト学会を日本の学者に呼びかけてほしい主旨の手紙（主催者、女王の大学教授、イーヴリン・マラリー (Evelyn Mullally)）と総会プログラムを、今回も同様に送付を受けていた。(クリスチーヌ・ド・ピザン学会等のように、主

NII-Electronic Library Service

Meisei University

催者側が予め出席者をセレクトしている場合とおのずから異なる。)今回の日本からの出席者は五名。

さらに1995年6月10日付で、今総会で会長に選出されたドナルド・マダックス教授(Donald Maddox) マサチュセッツ州立大学、(日付の時点で副会長) および同学会のアメリカ支部会長サル・スターム・マダックス (Sara Sturm-Maddox) 同大学教授の連名 (両教授は夫妻である) の書簡をうけた。委員会出席を求めていた。わが国における研究状況に関し、『国際アーサー王学会年鑑』(上記) や「国際宮廷風文学会」の『年鑑』を通してこの二名の書簡発信者は知識を持っている。D. マダックス氏は『アレクサンドル・ミシャ教授記念論文集』(上記) に寄稿しているので、すでに十分な知識をもっている[15]。

アーサー王文学を原則的に除外した、ほぼ同時期の中世仏文学を対象とする本学会は、わが国での研究者数は限られている[16]。それでも、外部から、上記の拙稿を通じ、にわかにわが国の研究への関心が高まったものと思われる。創立者コーミエ氏みずからの推薦を受け、書誌担当の任にあった稿者の意思は尊重され、学会の主旨——規約が初めて明文化された——が確認された。コーミエ氏は会期を通じ、稿者の許に話にきていたし、9月末、刊行されたばかりの論文の送付を受けた。

一方、名誉会長となった、イギリス・リヴァプール大学教授グリン・S・バージュス(Glyn S. Burgess) 氏もまた、拙稿 (上記) 全てを読んでいることを明らかにし、同氏の著書への協力を求められた (本稿提出の段階で脱稿。近刊。於イギリス。)

新会長のマダックス氏には会期中に稿者に面談を求められ、その内容は新体制に伝えられたと思われる (要旨の送付を求められた)。氏の研究発表は、『ポンテュウ伯の娘』でこの面談の中で、「佐藤輝夫先生の研究を想起して、主題を決めた」と付言があった。発表後の質疑応答では、まずバージュス会長の開会の挨拶に続いて基調講演をしたザンク氏 (上記) がまず発言し、「この興味深いテクストの研究は、非常に手薄」であること、「佐藤輝夫氏の「秀逸の」(excellent) 論文をおいては……」として、先師の『リタ・ル・ルジューヌ教授記念論文集』(*Mélanges Rita Lejeune*, t, II, Liège, pp. 1245-1255) に掲載されている論文への言及があった。ついで、稿者がその席で論旨を述べ、師の他の論文をも併せて紹介することとなった[17]。これは、先師にあるいは満足していただけた筈の出来事であった。

1964年、ランセスヴァルス学会で、先師が『ローランの歌』と『平家物語』のパトスの対比研究を発表された折[18]、フランス政府の給費留学生としてソルボンヌに在籍していた稿者は師に合流、御発表のあとル・ジューヌ教授 (ベルギー・リエージュ大) と『ポンテュウ伯の娘』に関する会話が先師との間で (稿者も同席していた)、既に人気ないテーブル (昼食後であった) で長時間交わされたのを思い浮かべる事ができる。

『ポンテュウ伯の娘』は「夫の面前で暴力の犠牲になった妻が、夫の殺害を企てる」という、極めて特異な状況設定をおく作品で、版本刊行者C. ブリュネル (Brunel) は、封建社会にあってはこれは事故ではなく不倫に間違いない、としたものであった。先師は、妻 (犠牲者) の繊細かつ洗練された、当時としては驚くべきヒューマニスムの感情表現である、と論証する一方で、『今昔物語』(本朝篇巻廿九第廿三話具妻行丹波国男於大江山被縛語) の類型的挿話を比較して、芥川竜之介の『薮の中』の遡源研究に寄与した (芥川の卒

NII-Electronic Library Service

Meisei University

業論文はウキリアム・モリス(William Morris)、『ポンテュウ伯の娘』を英訳していて1896年版本ないし1913年のモーリス『全集』の収録に注目されている)。また映画『羅生門』との関連も述べられている[19]。

『ローランの歌』と『平家物語』の比較研究についで、師の比較文学研究における『ポンテュウ伯の娘』とファブリオさらにマリ・ド・フランスの“エリデュック”が相次いで対比された『今昔物語』の一連の研究は注目されねばならないだろう[20]。師の追悼論文でジャン・デュフルネ(Jean Dufournet)(ソルボンヌ名誉教授)氏は、この線を指摘している(稿者は師のビオ・ビブリオの資料提供をし、氏より草稿の送付を受けている)[21]。

マダックス氏は、本テクスト(十三世紀初頭)を『ジャン・ダヴェヌ』(*Jean d'Avesnes*)と『サラデン』(*Saladin*)の二作を連携する「係累」の読みを強調する。この不運な伯爵の娘は、ジャン・ダヴェヌの孫——この係累は本テスクト(十三世紀初頭)の先史としてほぼ三十年後に構想された——であり、流刑先でイスラム教徒の王と再婚し、その系譜につながる曾孫がサラデンであった。『ポンテュウ伯の娘』は別名『海外の物語』、当時の異文化圏との軋轢、聖地巡礼の膨大なプロジェクト、十字軍遠征に因となる憎悪(1187年、十字軍はサラデンのモデルとなる人物に屈した)と、果てしない「富」の——中世語 riche は「富裕」であり「権勢」を意味する——「彼方」への憧憬とをない混ぜにした「海外」に、なかばはキリスト教徒、なかばはイスラム教徒の卓越の王子、騎士像を創造し、フランス王妃に「宮廷風の愛」を捧げさせることで、ヨーロッパ・キリスト教圏の威信を文学的に挽回することに成功した、とするものであった[22]。

「サラデン伝説」の存在は十九世紀末、G. パリス(Paris)の著名な論文により詳述されていた[23]。「係累」の視点はその意味で、G. パリスに部分的に回帰していくことではないのか? 先師は『トリスタン物語』——triangulaire の設定——よりも普遍的な図式をこのテクストに読み込んでいた。

マダックス会長は、佐藤輝夫先生の追悼論文を稿者に所望した。「国際宮廷風文学会」に先師は属されなかった。「国際アーサー王学会」「国際叙事詩学会(ランセスヴァルス)」は日本支部会長に先師を仰いでいたとしても。そう言えば、ビアンシオット氏をキャプとする同じく新しい「ファーブル・ファブリオ」学会にも関係はもたれていなかった。

中世フランス文学の国際学会すべてがわが国の同分野の先学に追悼の意を表したことになる[24]。

注

(1) *Bulletin de la Société Internationale Arthurienne,* vol. XLV(1994)、pp. 358-360. *Bulletin Bibliographique de la Société Rencesvals,* 1994-1995, pp. 9-11.

(2) 本稿写真ページ(20)〔I〕参照。

(3) 1931年10月。pp. 1-38.
なお、佐藤輝夫先生の著作目録は、以下三回、稿者による作成がある。
1973年までは *Mélanges de langue et de littérature du Moyen Age, offerts à Teruo Sato,* No. spécial, pp. i-v に収録、1993年までは *Mélanges de langue et de littérature du Moyen Age, offerts à Teruo Sato,* Partie II, Tokyo, Kenkyusya, pp. i-ix に収録。
さらに、比較文学、国文学、著作の書評、先生に捧げられた『記念論文集』等を網羅的に収録したものが、『比較文学年誌』、早稲田大学比較文学研究室、No31(1995)、pp. 112-135.

(4) *BBSIA* (*Bulletin de la Société Internationale Arthurienne*), vol. XXXIII, 577 ; Ibid., vol. XXXIII, 489 ; *Avalon to Cameloot,*

NII-Electronic Library Service

Meisei University

vol. III, *Studi Francesi,* vol. p. 395 ; vol. p. 602.

(5) 上記の私信で講演者が拙稿をすでに読んでいることが明らかにされていた。「私はあなたの論文に大変感嘆いたしました」(J'ai beaucoup admiré votre article) とあった。

Romania, vol. CXI (1994 pour 1990) pp. 361-384. (本稿は1990年8月18日、イギリス・ダーラムで行われた第16会国際アーサー王学会総会で行われた研究発表を基本的に収録している。(要約は上記学会の『年鑑』、vol. XLIII (1991), pp. 404-405).

(6) この学会に関しては、何回か言及の機会があった。日本関係のビブリオが同学会の収録対象となった経緯に関しては、上記の注(1)及び『流域』、佐藤輝夫先生追悼号、38号 (1995) の拙稿「佐藤輝夫先生の学問——その縁にあって」、pp. 54-61.

1949年、稿者の留学中の指導教授、ジャン・フラピエ (Jean Frappier) (当時ソルボンヌ大学教授) を中心に創立をみる。同教授のご尽力 (刊行費など具体的にも) で拙学位論文が1974年にフランスで刊行をみ、一巻を携え、教授 (同学会会長であった) を訪れる。その場で、日本関係のビブリオ作成等 (コレスポンダントの任務) を稿者に委任される。その間の1981年、日本の研究状況等がビブリオを通して、本部の認めるところとなり、日本支部の承認がなされ、佐藤先生が支部の会長となる。稿者は事務を20年こなした。1974年には、日本人会員8名、現在60名を超える。

(7) *Sur le thème de Nonchaloir dans la poésie de Charles d'Orléans,* Paris, 1974.

(8) Découverte du Moyen Age Francais au Japon, *Mélanges offerts à Alexandre Micha,* Paris-Greifswald, 1995, pp. 321-328.

(9) 『ロマニア』とともに『トリスタニア』誌も、本学図書館所蔵。

(10) 1995年夏刊行。Le Feu et la Fuite : Le *Tristan* de Béroul et les autres *Romans de Tristan, Tristania,* vol. XVI, pp. 77-100. (基本的には第十五回国際アーサー王学会総会での研究発表 (1987年、於・ルーヴェン)、要約は同学会『年鑑』、vol. XL (1988)、pp. 359-360).

(11) "Entre la *Chanson de Roland* et le *Roman d'Erec,* si Tristan n'existait pas, il faudrait l'inventer" (J. Bédier, *Le Roman de Tristan par Thomas, poème du XIIe siècle,* t. II, Paris, 1905, p. 153). 佐藤先生は上記著作を通じ、展開部分で三度引用されている (『上掲書』、pp. 40, 50 et 316)。

(12) 上記注(4)のほかに、拙稿 (書評) 参照 (『比較文学年誌』、18巻 (1981)、pp. 122-131.

(13) 仏米の専門家が目下用意しているクリスチーヌの著作版本を刊行に備えて、協力しているが厳密な中世フランス語の問題である。

(14) Jean Frappier, *Chrétien de Troyes, l'homme et l'oeuvre* (Paris, 1968) の英訳者 (Ohaio University Press, 1982)、「フラピエの思い出のために」と添書のある献本を受けた。

(15) スターン・マダックス氏は戦後のシャルル・ドルレアンの研究の総合的論評のなかで、稿者の学位論文を非常に好意的な扱いで、相当なスペースを当てている (*Oeuvres et Critiques,* vol. V. 1 (1980) pp. 16, 17-18, 22.)。

(16) アーサー王伝説に関心を寄せる者も20年前に稿者がビブリオを作成し始めた頃、おなじ状況であったが、激増したとはいえ、多くは国際的尺度に合わないか、と思われる。

(17) "Trois figures de la femme. A propos du film japonais *Rashomon* et de la *Fille du Comte de Pontieu*"

(18) 「フランス十三世紀の伝綺物語"ポンテュウ伯の娘"のテーマについて——説話の比較についての試み——」(「ソロモンの譬」、「ローマ人の事蹟」(*Gesta Romanorum*)、「不実な妻の話」(Historia infidelis mulieris)、インド・ロシアに至るまでのヴァージョンが比較されている)、初出は『比較文学年誌』(No 3 (1966))。所収、『叙事詩と説話』(早稲田大学出版部、昭和60年、pp. 173～208)。

(19) *Boletin de la Real Academia de Buenas Letras de Barcelona,* t. XXXI, (1965-1966), pp. 272-293.

(20) 「『今昔物語』の世界」(芳賀徹・平川祐弘編『講座・比較文学』。第四巻、東京大学出版会、1976。『叙事詩と説話』(上掲注(18)参照) に再録、pp. 111-172)、「今昔物語本朝篇世俗部の三つの説話と fabliaux—説話の比較研究—」(『比較文学年誌』、No 4 (1967)。『叙事詩と説話』に再録、pp. 209-254)。

(21) 著名なフランス・ベルギーの中世仏文学専門誌『中世誌』(*Le Moyen Age*) に掲載予定。(本稿写真ページ (21) 〔II〕参照)

(22) 十五世紀、ブルゴーニュの宮廷で散文の書換がなされ、この人物はイエルサレム奪回の夢を果てしなく追求めるヨーロッパの姿をなお仮託され続ける。*Saladin* (L. S. Crist, Paris-Genève, 1972) 以降 *Jean d'Avesnes* (A.-M. Finoli, Milano, 1979), *Le Dit du Prunier* (P.-Y. Badel, Genève, 1985) 1970年代になってぞくぞくと関連テクストも含めての版本刊行の契掛けとなったと判断しえよう。フランスのフォークロアに淵源を求める "Le Dit des Anelés" への関心もかかる線上のものである。

(23) *Journal des Savants,* 1893, pp. 363 et suiv.

(24) そのほか研究誌 *Romania, Studi Francesi* に拙文の掲載が予定されている。

(本稿は、日本比較文学会の機関誌『比較文学』、佐藤輝夫先生追悼号の拙稿「佐藤輝夫先生の学問」さらに仏文学の『流域』(上掲注、(6)) に執筆の補遺として構想されている)

NII-Electronic Library Service

Meisei University

〔I〕ファーブル・ファブリオ学会会長ガブリエル・ビアンシオット氏より稿者のもとによせられた草稿（日本フランス語・フランス文学会での特別講演）。

1

FRAGMENTATION DU RÉCIT ET INCONVENANCE DES SENTIMENTS DANS LE *TRISTAN* DE BÉROUL

On voudra bien pardonner au président de la Société Internationale Renardienne de sortir de son domaine familier pour traiter d'une oeuvre à laquelle il a dédié jadis un petit travail de jeunesse, et qu'il n'avait plus guère eu l'occasion d'aborder depuis, bien qu'elle l'ait constamment fasciné, le *Roman de Tristan*, dans la version de Béroul. Depuis nombre d'années, les débats autour des fabliaux, du Bestiaire et du *Roman de Renart* me sont devenus beaucoup plus familiers, et comme chacun sait, il s'agit là d'un domaine où les savants japonais se sont illustrés : nos collègues et amis Naoyuki Fukumoto, Noboru Harano et Satoru Suzuki sont les auteurs de l'édition critique moderne de référence du *Roman de Renart* ; les congrès de la Société Renardienne ont été honorés, de la présence, jusqu'à sa récente disparition, du professeur Takeshi Shimmura toujours venu accompagné de son épouse ; nous sommes très heureux de la constante présence attentive à nos assemblées de Hideichi Matsubara, et aussi d'entendre de jeunes chercheurs japonais prononcer à l'occasion devant nous des communications en français. Ainsi que l'a rappelé récemment mademoiselle Shigemi Sasaki dans les chroniques nécrologiques qu'elle a consacrées à Teruo Sato, publiées dans le *Bulletin Bibliographique de la Société Internationale Arthurienne* [1] et dans le dernier *Bulletin de la Société Rencesvals* [2], la légende tristanienne a été rendue familière au Japon à travers les travaux d'universitaires francisants tels que le maître qu'elle honorait, qui a lui-même consacré toute son existence "à méditer, à partir des données de Tristan et d'Iseut, sur l'amour et sur la mort" . Grâce à la traduction du *Tristan* de Bédier publiée par T. Sato en livre de poche dès 1953, affirme-t-elle , "de nos jours, le public japonais le plus étendu sait ce qu'est la légende de Tristan". Le Professeur Yorio Otaka a fait paraître au cours de ces dernières années deux très importants volumes d'*Oeuvres complètes* et de *Lexique* des oeuvres de Marie de France, auteur qui touche de si près à la thématique et à l'histoire tristanienne. Mademoiselle Sasaki a publié elle-même il y a peu dans *Romania*[3] un article particulièrement savant sur "L'émeraude d'Iseut et le jaspe de Tristan". Enfin, la très intéressante synthèse sur l'histoire des études médiévales françaises au Japon que notre collègue a donnée, dans le volume de *Mélanges* dédiés à Alexandre Micha pour son 90e anniversaire, met en évidence[4] la situation présente des études tristaniennes dans le très riche panorama des travaux japonais sur la littérature arthurienne, régulièrement répertoriés du reste dans la section japonaise du *BBSIA*. Il ne m'en est donc que plus difficile de parler de Tristan devant un public averti.

[1] XLVI, 1994, p.358-60.
[2] n° 26, 1994-95, 9-11.
[3] *Rom.*,111, 1990, p. 361-384.
[4] Lancelot - Lanzelet hier et aujourd'hui, pour fêter les 90 ans d'Alexandre Micha, Greifswald, 1995,323-4.

NII-Electronic Library Service

Meisei University

TERUO SATO
(1899- 1994)

Né le 9 janvier 1899 dans la préfecture de Tokushima (dans l'île de Shikoku), Teruo Sato fit toute sa carrière d'étudiant et de professeur à l'Université de Waseda à Tokyo où, après avoir obtenu sa licence de français en ...
séjour de deux ans ...

Ses qualités scientifiques, pédagogiques et humaines expliquent qu'il ait été honoré dans son pays de prix prestigieux (prix Yomiuri, prix de l'Académie japonaise des Sciences) et que ses amis, ses collègues et ses disciples aient offert à plusieurs reprises des Mélanges à ce savant de grande qualité qui fut l'un des fondateurs et de La Société japonaise de langue et littérature françaises et de la Société japonaise de littérature comparée. Il mérite de garder une place de choix dans notre souvenir et notre respectueuse affection.[1]

Jean DUFOURNET

1. Nous remercions chaleureusement Shigeni Sasaki qui nous a procuré de précieux renseignements sur son maître

ait un
5-1928),
, profes-
de la
tes Etu-
su re-
sité de
sionna
a con-
'Fran-

〔II〕ソルボンヌ大学名誉教授、ジャン・デュフルネ教授による佐藤輝夫先生追悼文(草稿)。稿者のもとに寄せらる。

NII-Electronic Library Service